

夕立の雲飛びわくる白鷺のつばさにかけて晴るる日のかげ

花園院

『風雅和歌集』巻四「夏歌」の一首。今にもあがる夕立の雲を分けるようにして飛ぶ白鷺の、その広げた翼に及びながら晴れてゆく日のひかりよ。

『風雅集』の成立は貞和五年(一三四九)頃と言われているが、この時代からすでに白鷺は歌の素材として好まれていたことがわかる。しかし、必ずしもはじめから良きものとして受け入れられていたわけではない。

『枕草子』第四十一段「鳥は」の章段で、「鷺は、いと見目も見ぐるし」とあることから、平安時代の美意識では、鷺は見目の悪い、およそ魅力的とは言いがたい鳥であったようだ。美意識が変化するのは中世になってから、とくに京極派の歌人たちが、その白い色彩の美しさに注目した。その辺の川辺などにいるあまりにも身近すぎる存在のためか、勅撰集に白鷺の歌が入ることは減多になかった。



ところが、『玉葉集』『風雅集』にだけは集中して収められており、その半数以上が京極派の歌人たちによって詠まれたものであるという。

もともと田園を飛ぶ白鷺の美しさを発見したのは藤原定家とのこと。それを再発見して『玉葉集』に採ったのが京極為兼であった。

夕立の雲まの日影晴れそめて山のこなたをわたる白鷺  
藤原定家

掲出歌が定家の本歌取りなのは明らかだろう。定家の歌は、雲間から差す夕陽が緑の山を包むのを背景に、白鷺が一点の白を置いて飛んでゆく。対して花園院の歌では「つばさにかけて」、白々と広げた翼にひかりが映えていると視点をきわやかに接近させて、ドラマティックな表現でその美を演出している。定家は、唐の詩人・王維の詩句「漠漠タル水田白鷺飛び、陰陰タル夏木黄鸝囀ル」などの漢詩を学び、そして京極派の歌人たちは定家から学んだ。新しさは、古さをじっと見つめるなかに見つかることがある。

(小島なお)